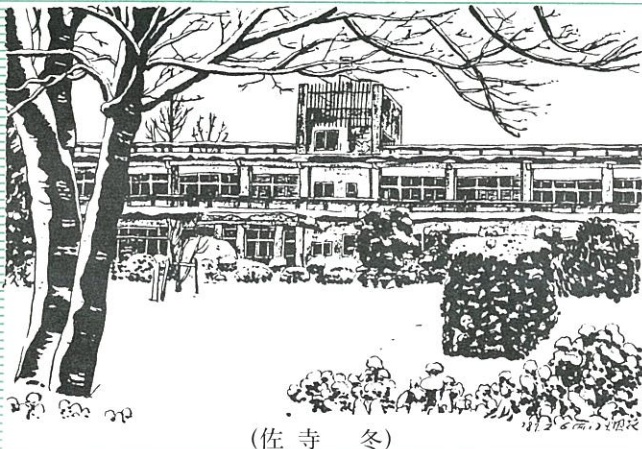


特 集

これからの森林・林業・
林産業と試験研究

林試 だより



(佐寺 冬)

(((フォト)))

〔組織培養によるクヌギの増殖〕

クヌギの増殖は種子によっているため、優良種苗の安定的確保が困難な状況にあります。そこで、バイオテクノロジー=手法によるクヌギ優良個体の大量増殖法の研究を開始しました。写真は栄養分を含んだ試験管内の培地上で増殖中のクヌギの新梢です。

【特集】これからの森林・林業・林産業と試験研究

これからの日田林業と 研究・研修機関について

グリーンポリス圏域
林業試験研究連絡会会長

日田市長 石松安次

我が国の社会経済は21世紀に向って、高齢化・情報化・国際化などが急速に進展する今日、生活の質的環境や精神的価値をより一層重視する社会への移行が予想される。

日田地域は、全国有数の林業地域であり、本地域の基幹産業として、日田杉を中心に、素材の集散地として、製材加工の専門的分業・流通構造のなかで、営々と築かれてきた歴史的経過がある。しかし、最近における外材輸入の増大・林業従事者の高齢化など極めて厳しいものとなっている。

さらに、後発林業地における協業体制の大型合理化などによって内容を充実し、多量の国産材が市場に出回る状況のなかで産地間競争がエスカレートすれば、内陸型製材地帯である当地域は大消費地までの輸送コストの増高、また品質においても特定銘柄を持たないといった状況から、不利なたたかいを余儀なくされることになりかねない。

このような現状のなかで、当日田地域は、昭和64年度に交通革命ともいべき九州横断自動車道の開通が予定され、地域社会経済に大きなインパクトをもたらすことは必定であり、森林林業・木材産業においても新たな対応が焦眉の課題となっている。

まず、県においても、昭和60年度よりスタートをみたグリーンポリス構想のなかで、「森林産業文化圏」の建設を目指し、全国屈指の林業地である日田地域の活性化を目的として、森林資源の整備、林業生産活動の活性化、加工流通の機能整備・合理化を進める必要があ

る。このことにより地域の豊富な森林資源を活用した森林レクリエーション・試験研究機関の充実、さらには定住環境への整備、社会教育の充実、交通体系の整備など総合的に地域経済のボトムアップを図ろうとするものである。

当日田市においても、21世紀を目指した都市ビジョンを策定している。

第一に、北部九州の奥座敷に文教・観光の拠点都市を実現する。

第二に、機能的で快適感あふれる20万人地方中核都市を実現する。

第三に、若者が定住し、活力あふれる産業都市を実現する。

第四に、人間性回復を原点に、安心してしあわせにくらせる福祉都市を実現する。

特に林業地としての位置づけは、若者が住みたい活力あふれる都市として、森林・木材関連地場産業の活力化を目指し、グリーンポリス構想の主旨に基づき、国産材主産地の形成と、時代が要請する国土保全機能と、併せて森林保養機能の向上を図る。

施策的には、森林施業の向上とともに、特に関係業界一体となつての供給体制の整備・加工・流通対策が最重要課題となっており、グリーンポリス圏域はもとより福岡・熊本の一部も含む林業の中核都市として、本市がその機能を果たすべく国産材主産地形成の確立と供給体制整備事業の拡大・発展とともに、本市林業が抱える問題に対処する必要がある。特に、木材流通団地の形成・乾燥加工の重要性に鑑み、原木ストックヤードなど原木市場の団地化、あるいは木材需要の多様化するニーズに対応できる林業経済情報の分析、試験研究を総合的に確立する研修機関の充実を基本的施策と考えている。

具体的には、まず、日田地域の森林資源の実態に即し、従来からの画一的施策ではなく

適地適木を基本とし、高伐期・高蓄積・高品質・高生産のなかで、保健文化機能をも発揮し得る森林空間の総合的利用につながる天然林・広葉樹林への転換をも含めた森林施業の推進、林業生産基盤の整備と林産物の生産流通加工の有機的・質的整備など林業関係者の意向をも踏まえ、これに基づき今後10年間を見通した森林・林業・自然環境など総合的計画的に推進するため、本年度に「林業振興地域整備事業」の指定を受け、計画策定を行っている。

特に森林とのふれあい環境整備として、国のリゾート地域の指定の模索を含め、国民の価値感が多様化するなかで、森林に対する要請も、森林・林業の中核都市の確立と併せ国土保全、水資源涵養等の役割に加え、快適環境、精神的なゆとりの場として、グルメ志向、アウトドア志向での健康的な活動の場など保健・休養・文化・教育の場の利用が急務となっている。併せて、林業研修機関の充実についても、今後急速に高齢化が進んでいる林業

従事者の後継者育成対策、特に若者を定着させる環境作りなど今後日田地域林業の活性化にとって不可欠な課題となっている。

このためには、地域林業経営の意識改革と森林蓄積の資源を充実し、力量あふれる林業地域、木材集散地として「仮称 日田林産業短期大学」の設置を柱とした若者の移入や地域におけるテレトピア構想のなかで、林業情報発信基地の確立など林業研修機関の総合的立地を図りたいと考えている。

とりわけ、日本有数の林業地である当地域が、西日本唯一の木材集散地として、九州横断自動車道の開通を契機に、「木の都市日田」の確立を図り、森林資源の多面的機能を、民間活力をも生かしたなかで官民一体となつての森林林業の新たな活性化を図る必要がある。

以上「林試だより」発刊30号にあたり、21世紀日田地域林業のあり方の一端を述べたわけであるが、要は「泣きごと」だけではなく関係機関・団体一体となつての真剣な取り組みと実行が必要であると考えている。

山を



歩けば

4月のある日、「これがクサソテツですか。」と数本のシダを持参された方があった。クサソテツは前号で紹介した通りであるが、そのシダは大ぶりの鱗片に覆われたイノデのワラビ巻きであった。違いますよ、と答えるとその方は残念そうに帰って行かれた。確かに、イノデの若い葉はクサソテツに似ていないこともないので、その方の間違いも納得される。

このイノデであるが、スギ林内等に多数生育するシダであり、1mにも及ぶ葉を叢する様はなかなか壮観である。葉柄に大きな鱗片が密生し、その様子がイノシシの手のように見えることからイノデと呼ばれる。小葉は鋭い鋸歯を持つ。種類は多く、何々イノデ、何々デンダと呼ばれるものはほとんどがこの伸

シダ (7)

間である。県内で最も多くみられるのはただイノデという名前のもものが最も多く、ほとんどがこの種である。比較的湿度の高い場所に多いことからスギ植栽適地を示す良い指標となる。



イノデ (伊藤洋「シダ」1973, 北隆館より)

これからの林業試験 について考えること

三菱化成機総合研究所
血脇幸雄

1. 林業の再認識

最近の林業を巡る環境は誠に厳しいものがあります。林業経営者は輸入外材や合板の攻勢で四苦八苦しているのが実情です。

しかし、いうまでもなく、林業は木材のみを生産しているわけではありません。環境調節機能や、水土涵養機能など数々の付帯的価値を生産していることは、よく知られています。

ですから、林業の将来を単純に生産木材の市場競争力で展望するのは、大きな問題であるといえます。

現在の日本の繁栄を支えているのは、もちろん日本人自身の努力による所も大きいと思いますが、その基盤は日本に森林資源が存在していたからに他なりません。極論すれば、農業も近代工業も森林を基盤として成立しているのであって、それぞれの産業が単独に成立しているわけではないのです。

例えば、小麦を1kg生産するのに必要な水の量は約1tといわれていますし、レーヨン1tを生産するためには、約1,800tもの水が使われるといえます。また、最先端をいくエレクトロ技術の分野でも豊富で良質な水の確保が絶対に必要なのです。

私たちも生活用水として一人当たりおよそ300ℓ/日もの水使っています。

この水を供給しているのは、いうまでもなく森林であり、その森林を養っているのが林業なのです。

「うさぎいないはげ山〜。こぶなつれぬかの川〜。」となってしまうのは、近代文明は成立せず、繁栄も進歩も有り得ないのです。

幾多の文明は森林の荒廃とともに衰亡を繰

り返してきました。こうした歴史的事実を私たちはもっと謙虚に受けとめるべきでしょう。

2. 林業の研究姿勢とその夢

林業の研究は文字通り、地道なフィールドワークと広い視野に立った長期展望や哲学が要求される研究分野であると思います。

林業を俯瞰的に把握し「林業の役割とは何か」といった基本的なスタンスは忘れるべきではないでしょう。

従って生態系に果たす森林の複合的役割や評価の研究、あるいは林業、農業、工業間における林業の経済的寄与率等の基礎研究は将来とも重要な研究課題であると思います。

また最近脚光を浴びているバイオテクノロジー分野の研究は今後さらに発展するものと思われます。つい最近のことですが、パパイヤ雌木の組織培養の成功というニュースもありました。

成長が早くて病害虫耐性に優れた樹種、あるいは高塩類土壌、耐暑、耐寒性に強い樹種が開発される可能性も夢ではないかも知れません。

応用分野の研究の一例では木材と他資材のハイブリット化、複合化の進展も期待したいものです。木の持つ質感や暖か味を失わず、しかも耐性や強度に優れた独創的な新素材が生まれたら、私たちの生活はより豊かになるに違いありません。

これは木材振興と付加価値向上の面からも林業経営に貢献するものと思われる。

林業にはまだまだ夢のある研究がたくさん考えられます。

一国破れて山河ありと古人はいつてもいます。例え国が破れても山河がある限り再生・復興も可能なわけです。飽食暖衣に浮かれていたら山河がボロボロになっていたということにならないよう、林業を夢のある産業に育てるには、研究者自身が林業に対して限りないロマンを持つことが最も大切なことだと考える次第です。

樹苗生産者の立場から

＝ 今後の造林について ＝

清 滝 樹 苗 園
清 滝 望

森林の危機が叫ばれ、緑を守れの声が高いのと裏腹に我々の林業は、底なしの不況に泣かされています。内外の経済状況の変化から産業としての林業が経営困難な状況に立ち至り、これまで健全な経営によって支えられてきた森林の効用さえも次第に失われるのではないかと心配されるようになった。数年前から識者の間で従来の拡大造林に対して反省がなされている。一方で社会はハイテク時代を迎え人間が密集し、水や緑や良い住いを求め、できるだけ自然にふれながら暮らしたいと言う要求が高まっている。

このような現状の中で、今後の林業のあり方について多くの論議がなされて来た。2年間に亘る林政審議会の検討の結果が「林政の基本方針—森林の危機の克服に向けて—」と題され報告された。その中に「21世紀に向けた森林に対する多様な要請に応えるため複層林や広葉樹林の造成を目指すよう、また木材供給を平準化するため伐採齢の多様化等森林整備方針の転換を図る必要がある。」と提言されています。現実に対応したそのような指向を地域の造林について考えてみることにし、研究機関への希望とします。

(1) 複層林の造成について

当地域は小径木短伐期一斉皆伐の慣習であったものが、アンケート調査結果によるとやはり伐りびかえから非皆伐に向っているようです。しかし、今までの効率優先と目先の経済性重視の波に押し流されがちな現状から樹

下植栽をして複層林を誘導するという事は林家にとってかなりの抵抗感があるのではないかとと思いますが、皆伐して高く売れるものを買ってもらおうと言う対応では無駄が多過ぎる上に後の造林と言う大きな負担に打ちひしがれることとなります。樹木は数十年と言う年月をかけ、生きている限り成長を続けるものですから一時的な理由で淘汰してしまうのではなく、木のもつ時間の集積という大事なものを更に価値あらしめるために、一部を残しておいて大経優良材として多彩な木材需要に対応する能力をも森林を育てることに林業的意味の大きなものがあると思われま。特にこの地域は他の新興産地より古い林齢級を持つだけに将来にかけその効果が十分に発揮されるように思われます。

全く不透明な将来の木材需給構造のもとで、厳しい選択の岐路に立たされている個別経営の方針を決める上での判断材料としての情報、それは、適地判定・樹下植栽の樹種・品種・植栽密度・苗木の大きさ・施業技術と生産目標や集約度との関係、特に地域の殆んどは画一的林分であり、その状態から複層林へと誘導するために個別経営のタイプに合った指針についての研究等。また、集約的で多種少量・優良材生産、省力低コストで少樹種大量・一般材生産、そして長期施業・短伐期施業およびこれら方式の組合せなど多様な対応があり、或は矛盾も内包するかも知れないが研究機関において技術と経営の研究課題として今後取り上げて頂きたい。

(2) 広葉樹林造成について

天然林からの有用材供給にはおのずと限度があり、将来、住宅・家具の高級化などの需要に備え用材として付加価値の高い広葉樹を経営の一部に取り込む事も必要かと思えます。クヌギについては本県がリードし指針も示されているが、他の広葉樹は実例が少ないだけに、樹種の選定・適地判定・複層樹下植栽・採種採穂源確保それに施業技術の総てについ

て試験研究の課題として頂きたい。

森林づくりの元は苗木であります。現在は、数樹種の生産がやっとと言った状況です。それは、母樹の殆んどが自然木であるために種子の結実が不安定なことが原因です。苗木養成をしているケヤキ・イヌエンジュ・カエデ類等も4～5年の隔年結実であるために採種が大変困難で、当面は採種・採穂園の設置、薬品処理などによる早期着花結実促進、ケヤキ優良系統の選抜と増殖方法、ヒノキ精英樹クローン選抜と無性増殖等の試験研究が必要である。さらに、将来的には、現在取り組んでおられるバイオテクノロジーによる林木の

大量増殖、人工種子製造や遺伝子操作による新品種の創成・品種改良など大いに期待したいところであります。

いづれにしても森林・林業のもつ超長期性を再認識して、出た選択はアレカ・コレカではなくアレモ・コレモと言う多様な選択をすることにより慣習からの脱皮をはかることができるかと思えます。常識への挑戦なくしては技術の革新はできないのであるから、研究機関それに団体も個人林家も鋭意連携を密にこの難局に取り組んでゆきたいものと思えます。

質問コーナー



Q：質問

A：答え

庭木スギの 異常葉の原因は？

Q. 最近、庭先のスギの新葉が下垂れし色も退色しています。何が原因なのでしょう。

A. おそらくスギノハダニの加害によるものと思われ。この害虫はスギの葉を吸汁加害するため被害葉は退色し、加害が激しい場合はスギの生長を妨げます。被害は造林木、生垣、庭木などに頻繁に発生します。5、6月に葉の色が悪くなったら、小枝をとって白紙上でたたいてみると、微少なアカダニが動いているのがルーペでも見えます。スギノハダニの生活史はスギの葉に産みつけられた卵で越冬し、4月にふ化し、11月ごろまでに10回以上発生を繰り返します。一般に密度が高くなるのは5～6月と9月ごろです。梅雨明けごろ葉の退色が目

立ちますが、この時にはダニはむしろ少なく、白い脱皮殻が多くみられます。梅雨時に雨の少ない、いわゆる空梅雨の年に大発生します。

Q. 何か防除方法がありますか。

A. 散布薬剤としてアカール粉剤（クロルベンジレート3%）、クロルマイト粉剤（クロルプロピレート3%）を10日間隔で数回散布します。

（保護科・高宮）



間伐の必要性について

指導林家

田代和芳

昭和43、53年の雪害は耶馬溪地方に大きな損害をもたらした。丹精こめて育てたスギ林が将棋倒しになった。倒れた木を切り、何とも空しい気持ちで、切株に腰かけボンヤリとしていると、切株が私に話しかけてきました。切株は、私に何かを訴えていますがよく判りません。でも切株は一生懸命何かを訴えているのです。私は切株達の訴えを一つ一つ聞いて回りました。

すると、切株達は皆同じ年輪をしていることに気がつきました。良く調べてみると年輪の幅は、5年生～10年生頃までは年輪幅が最も広く肥大生長が旺盛です。そして14～15年生頃まで順調に生長しているが、それ以後は生長が止まり年輪幅は急に狭くなり、20年生以後は針で数えるほどに目づまりした状態になっていました。

切株達はこの15年生以後の目づまり状態（生活苦）を訴えていることが判りました。そして、この切株達の訴えが杉の木の訴えであることに気がつきました。

私は、杉の木の訴えを解決してやることを約束し、どうすればよいか杉の木に相談しました。すると、杉の木は15年生以後の肥大生長が止まるのは生活上大変に苦しいから何とかして欲しいと言いました。つまり、15年生以前の生活の状態を保ってやればよいのです。15年生以後早い時期に1本おきに間伐をして、太陽がタツプリと当るような環境を作ってやることにしました。

だが、大きな問題があります。

戦後、荒廃した山を切り開き丹精をこめて植え、育てた父が1本おきに間伐をすることなど許すはずがありません。私は、杉の木と

父親の板挟みにあい大変困りました。

しかし、杉の木には一刻の猶予もありません。とうとう私は、杉の木の言い分を聞き、日本一の親不孝の馬鹿息子になることを山の神様にお許しいただき、14年生のスギを1本おきに間伐しました。

父に見つかったときのショックを少しでも和らげるために切株達の話をし、説得しましたがなかなかお許しはいただけません。私の言動に不振を抱いた父は山をみて回りました。そして、メチャクチャに間伐をした山を見つけられ、顔を真っ赤にして大きな大きな雷をいただき、1ヶ月も口を聞いてくれませんでした。

しかし、私は山林のためにその後も一生懸命間伐を続け、5年、6年と年月が過ぎ、山はすくすくと気持ちよく育つようになりました。頑固な父もようやく間伐の良さが判り、地域の人々に「山は間伐をしなければ」と話しているのを聞き、日本一の馬鹿息子もやっと許してもらえたとおかしくなり、一人で大笑いをしました。

その父も昨年の盆に高校野球をみながら他界しました。山に行くたび、あの山、この山と父と働いた思い出でいっぱいです。親という字を分解してみますと「立木を見る」となります。正に我が父は父親の見本であったと思います。

林業用語

人工種子

自然の種子は雌親と雄親の有性交配によって発生し、胚、胚乳、種皮などで構成されている。ところが、組織培養において無性的に人工の胚（不定胚）を作ることが可能となってきた。この人工胚の周辺に栄養分（自然種子の胚乳に相当するもの）を入れ、人工の膜（自然種子の種皮に相当するもの）で保護することによって人工種子が作出できる。アメリカなどの企業は、この人工種子の研究、開発に熱い期待を寄せている。（佐々木）

スギ材の品質向上の 取り組み

佐藤製材所
佐藤浩幸

大分県は、日田林業を中心とした全国有数のスギの産地です。

そして、生産される丸太や製材品は、大量に県内外に出荷され、本県の重要な産業品目となっています。

こうした中で、近年、住宅等木造建築物の性能向上が叫ばれ、需要者からは、良質の丸太とその製材品の要求は年々高まる傾向にあります。

今年は、6月から8月にかけての異常な長雨によって、日田地域においては、大量のオゾウムシが発生し、スギ丸太は、多くの虫喰いの被害を受けたのです。

また、その被害材を製材する製材工場においては、虫喰い材による製品不良をきたしたのです。

特に、今年は、今まで低迷を続けていた木材価格が、7月中旬以降、ヒノキ材を主体として、大幅な価格上昇がみられました。

このため、長期間山元に放置されたままのスギ・ヒノキの除間伐材が大量に原木市場へと出荷されました。

この中には、虫喰い材や変色、腐れ等の欠点材も多く混っており、この丸太による製材品は、当然のことながら製品不良が目立ったのです。

特に、私が残念に思ったことは、樹齢70年前後のスギ丸太においても、長期間にわたる山元放置や不適正な伐採によって、虫喰い、変色、腐れ等が生じ、品質、価格とも並材以下となった事例を見たことです。

折角、丹精こめて育てた立木を丸太管理の不備によってムダにすることは、誠に惜しいことでもあります。

こうしたことから、良質の丸太や品質の良い製品をつくるためには、それぞれの作業に当っては、きめ細かな配慮が必要であると思うのです。

まず、林業の丸太生産現場においては、適正時期の伐木、造材や丸太の山元乾燥を行うことである。これによって、虫喰い材やカビ、腐れが防止できるのではないのでしょうか。

そして、丸太の適正伸び寸の励行です。

例えば、3メートル材の場合、適正な伸び寸（5センチ程度）がなければ、よほどの直材でない限り、製材品の両木口を備える場合横切り作業において、長さ不足が生じます。

また、製材工場においては、製材品の挽肌の向上、歩切れの防止、選別格付の徹底、木材乾燥の推進等を図る必要があります。

特に、近年、産地間競争が激化する中で、製材品の品質向上は、需要者の信用度の向上や販路の拡大を図るうえにおいて、極めて重要となっています。

なかでも、木材乾燥については、役物は勿論のこと、上級構造材においても、強度面や狂いの防止といった観点から、乾燥材の要求は高まるものと思われます。

私の製材工場においては、数年前から、原木の完全乾燥はとうてい望めないことから、工場内における天然乾燥により、できるだけ乾燥を行い、乾燥材を供給するよう努めています。

また、最近、各種の人工乾燥装置が出回っていますが、コストや採算性を考えると、現状では、なかなか導入できにくい面があります。

しかし、今後、スギ材の品質向上については、あらゆる角度から改善していく必要があります、そのためには、林業や木材関係者、さらには、行政、試験研究に携わる人々が一体となって、地域材の品質向上に取り組む必要があると思うのであります。

生きていた豊後ナバ師

安心院キノコセンター

岩尾 弘 人

エノキ茸を初め、ウォーターマッシュ、野生のエノキ茸さらに原木の生椎茸、ナメコならびに菌床の生椎茸、ナメコなど9種類の食用キノコを生産販売しております。さらに今年から灵芝（万年茸）の生産にとりかかりました。9年前に食用キノコからスタートして、今では薬用キノコの研究生産にその方向性を見出しております。

ある統計によると、昭和59年度全ての市場に流通したキノコは32万tで、2,500億円の販売実績があったものが、昭和60年度には、その生産量が増加したにもかかわらず、2,300億円で販売額は低下しています。この現実の中で“食用キノコの時代は終わった”と云う考えをする識者の指摘はうなずかれるものがあります。さらに大企業のキノコ産業への進出はゆゆしき問題です。その戦略は奈辺にあるかは定かには理解しかねる面もありますが、一つの時代的風潮ではないでしょうか。アグリ・ビジネスへの新規参入がマスコミに取り上げられている昨今、我々生産者はその生産基盤が日々大企業に浸かされている不安を感じています。とりわけ山村経済に占めるキノコ生産の比重の大きさをみると、現状の乾椎茸産業の衰退に大いなる危惧を禁じえません。

それでは乾椎茸はこのまま駄目になるのでしょうか。そうではないと思います。確かに大企業による菌床生椎茸の生産量の拡大の流れは大きくなるでしょう。さらに、消費性向としての乾椎茸より生椎茸の消費量の拡大は、もっとその格差を広げていくでしょう。今、現実に進行している菌床生椎茸の生産量の増加は如何んともしがたいと思います。この“流れ”は行きつくところまでいって、そのゆ

り戻しが原木生椎茸の良さが見なおされていくと云うパターンは今日の時点で予想されることではないでしょうか？

それでは、我々生産者はこの時の流れに、やられっぱなしで、ただじっとして、いいのでしょうか。その対策はないのか？ 私はあると思います。

先日の事ですが、宮崎大であった日本栄養食糧学会の後、宮大の河内教授の案内で宮崎県内の各種キノコの生産者を訪れ、そのキノコを見せていただきました。その中で、小林市のある生産者の原木と菌床の各種キノコの生産施設を見て驚きました。マイタケ・シメジ・ナメコの空調施設の有り様を見て、これらのキノコの生理・生態を実に良く理解して設備をつくられているのです。原木の生・乾椎茸にしても、実に素晴らしい品質と抑制技術をもっておられました。“まだ豊後ナバ師が生きていたのだ”と帰り車中で同行の大学教授に話したのを覚えています。

私共のように、菌床キノコを主体とする生産者にとっては、原木のキノコ生産者の技術進歩のスピードは遅いのではないかと思います。確かに菌床キノコは1月半から4ヶ月でその結果を知ることができますが、原木の場合2年以上かかると云うタイム・ラグの違いがあることが、技術進歩のスピードの違いとなって表われるという事実については認めます。

しかし椎茸の純粋種駒が開発されて40数年の間に、どれ程の技術蓄積を生産者の側でなされたのでしょうか？ 種駒を漫然と植菌していたのではないのでしょうか。又、ナタ目栽培の頃のホダ木の管理方法の中に、キノコ栽培技術の原点があることを忘れてはいないでしょうか。生産者各々が技術の原点に戻って、改めて自分達の生産技術の見直しをしていくなかにしか、今日の厳しいキノコ産業の現状を打破する方策はないと思います。

試験研究の立場から

大分県林業試験場
場長 後藤 泰敬

21世紀は、巨大科学技術に支えられた高度情報化社会となり、豊かな物社会から精神との調和が強く求められる時代といわれています。やすらぎのある緑、うるおいのある木の住い、木の文化への人々の希求が大きくなると考えられ、森林・林業・林産業の一層の充実が必要であります。

このことは、昨年11月の林政審報告「林政の基本方向―森林の危機と克服に向けて―」でも述べられており、国内外のきびしい経済状況の中で、生活環境としての森林機能の充実と国産材時代の実現化に向けて、各種の施策事業が強力に実施されつつあります。

このような背景の中で、21世紀に向っての地域林業林産業の展開は、緑の国土保全など森林機能の増進を図りながら、多用途多品質の木材資源を蓄えた森林を造成するとともに、この資源により良質製品の生産加工と安定供給を図ることが最も大切なことであり、育林生産、流通加工の産地一体化・体系化の確立が強く求められるところです。

他方、試験研究部門においては、このような情勢のもとに技術の高度化、効率化、低コスト化の研究開発が重要かつ緊急となっております。育林面では、諸被害抵抗性樹種品種の育成、優良多品質材森林の造成、林業各種施業の省力化・機械化、森林の環境保全機能の高度化などの育林施業技術の改善開発。また林産面では、バイテク技術によるきのこ等特用林産物の高品質化、製材品の高品質化・高規格化、木材製品の耐久性向上、新材材製品の開発など生産加工技術の改良開発。等々緊急に研究を要する課題が山積しています。

産官学による共同研究が各界で進行しつつある昨今ですが、林業林産業の試験研究はその産業基盤の性質上から、産業界による研究投資が十分に得られる状態にないので、国公立の研究機関は大きな重責を担っていると思います。今後とも積極的に、地道でねばり強い研究と成果の集積に努めるとともに、本誌に寄せられました貴重なご意見も充分参考にさせて頂き、その責務を果たしてまいりたいと考えておりますので、読者各位の一層の御支援御叱正をお願い致します。

編集後記



林業・林産業に関係している方々に意見を述べていただいた今回の特集いかがでしょうか。現代科学技術の進歩は分進秒歩といわれていますが、こと林業に関しては、なかなかうまくいっていないようです。林業・林産業を取りまく環境は非常に厳しいものがあり、我々関係者にとって、昇龍の出現を期待したいものです。

この「林試だより」も発刊以来30号15年となりました。みなさま方の御協力によりここまでやってこれたものと思います。御協力ありがとうございました。

なお、御意見、御要望などございましたら遠慮なくお知らせ下さい。お待ちしております。今年もどうぞよろしくお祈りします。

職員一同

林試だより No.30

発行 昭和63年1月5日
編集 グリーンポリス圏域林業試験研究連絡会
大分県林業試験場
大分県日田市大字有田字佐寺原
TEL. (0973) 23-2146~7
印刷 川原印刷/日田市上城内町1281-3
TEL. (0973) 22-3571